

# 新発田歩兵第百十六聯隊奮戦記

## 【第2回】南京に向う追撃戦

新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

昭和十二年十一月一日、聯隊は羅店鎮附近の警備に任ずることとなり、二日夕まで重藤支隊（台湾守備隊）と警備を交代、同十二日南京に向う追撃戦まで同地附近にあった。この間しばしば敵の小攻撃を受けたが之を撃退し任務を完了した。

蘇州河附近、軍（師団は中支那方面軍に編合）主力の戦況は頓に進展し又第十軍の杭州湾上陸も成功、軍命令により、第十三師団は遂次兵力を北方に移動し、劉家鎮方面より敵線を突破、太倉北方地区に進出し敵の退路を遮断すべき命を受け攻勢に移ることとなった。

聯隊は十一月十三日朝、追撃戦闘を開始、夕刻陸渡橋附近劉河の線に達し、翌十四日払暁劉河を突破、十八日呉福陣地の要衝、謝家橋鎮附近の陣地に突入、迫撃砲二、機関銃六を有する約六百の敵を攻撃し三日間にて之を撃退し呉福陣地崩壊の因をつくった。

此の敵を青陽鎮に向い追撃、第一收容陣地、第二收容陣地を突破、続いて長寿大河の敵を突破し二十七日夕刻江陰、無錫の間の要衝青陽鎮附近に進出して江陰要塞の攻撃準備に着手した。

十一月十二日攻勢転移から二十七日までの間は、天候不良で、内七日間雨天のため人馬の困憊その極に達した。

劉河河畔から江陰に至る地域は、大小無数のクリークが田畑の間を縦横に走り、道路は悪く泥濘化し、部隊の連続通過は愈々泥濘の度を増し、徒歩者は脚を没し、馬は腹に及び、人馬疲労し、特に馬匹は斃死するものも生じた。橋梁は殆ど破壊され、残ったものの多くは巾狭き石橋、小木橋の有様で、工兵をして橋梁を補修して前進するも一時間一キロを出ず、困窮を極めた。

追撃十六日間、意図せず軍の最右翼の最困難な地形を踏破すること五十余里（二百キロ）第九師団（金沢）重藤支隊（台湾）等の現役兵団に等し、遜色なく、むしろ優位の行動を以って越佐健児の気を吐き青葉師団の名声を揚げた。常に軍の最右翼前方に在って、急進又急進、遂に敵をして停止するいとまを与えず、青陽鎮に突入した果敢な攻撃であった。本戦闘に於いて敵に与えた損傷、遺棄屍体千名、捕虜三十二名、我が損傷戦死二十二名、負傷五十八名。

師団は十一月二十七日払暁、軍より江陰要塞を封鎖し攻撃準備を実施するよう命ぜられ兵力を峭岐鎮及び青暘鎮北側に集結した。

そもそも同要塞は揚子江水路の大関門で、我が海軍の遡江を阻止し南京を安全にしようとするもので、中華民国政府は東洋第一の堅塁と自負するまでに設備し、その守備兵力は一万を超えた。

二十七日夕、軍の戦車大隊到着し独断南関鎮を攻撃、二十八日朝その一角を占領し又軍重砲兵旅団も到着し花山に対し砲撃を開始した。

師団も呼応し攻撃開始、聯隊は師団直轄として残されていたが、第一線の戦闘は容易に進まない為、聯隊を右翼方面に使用、同方向から戦果拡張するに至った。

三十日堅塁定山を果敢な夜襲を以って、占領し、翌十二月一日、日金童橋附近の敵陣地を攻撃、二日未明之を突破し直に蕭山、黄山砲台の攻撃に猛進、午前十一時之を攻略、師団は完全に江陰要塞を占領した。

聯隊は江陰東側王村附近に兵力を集結し爾後の攻撃を準備する事となった。

師団が江陰を占領した当時、軍は一挙に南京に向う追撃を企図していた。又海軍は南京に遡江して陸上作戦に策応する企図をもっていたが、長山附近に敵の閉塞船があり、北岸には処々敵の陣地があり天生港鎮附近には砲台も存在し、揚子江水路開放を期するためには一部が対岸に渡河する必要が起こった。

揚子江は千古よりの大河で、河幅江陰附近で二千五百から三千メートルに及び干満の差は甚だしく、流速二～四メートルである。

南岸には蕭山、黄山、鐘山などの高地があつて、対岸の視察、渡河援護共に便利であつたが、河幅が広く大なるため双眼鏡を以つてしても水面上にガスが発生すれば模糊として展望を妨げられ、河岸は葦が密生し舟艇の着達の適否不明であつた。

洋々たる大河の渡河作戦は軍にとっては歴史的大事業で、この様な経験をもたない師団幹部以下その成功に一抔の不安を抱かざるを得なかつた。

師団は渡河作戦に第二十六沼田旅団長（歩五十八聯隊高田欠）に内意を示し諸準備を行わせた。聯隊は空前の壮挙に参加する栄光に欣喜し士気大いに揚がった。

之に依つて旅団長、聯隊長も蕭山砲台に上がり小隊長以上を集め、渡河に対する現地指導を行い、決行は七日夜と決まった。

第一回渡河は左右両翼隊、第二回は爾余の部隊とし、第二、第三大隊、聯隊機関銃中隊、聯隊砲中隊、歩兵砲中隊（二分の一）を以って、八日午前四時三十分乗船完了、五時三十分上陸点目ざし攻撃を開始した。

此の日師団長は参謀長以下幕僚を伴い軍参謀及び大本営職員も同行し黄田河口付近の旅団長の許に至り、渡河状況を視察した。

渡河部隊の舟艇は進発したが、未だ四面暗黒江上静粛で対岸は眠っている如く、舟艇群は闇を縫って前進し遂にその片影も認められぬ状況となった。

師団長以下歴史的渡河に対し、切にその成功を祈り、一刻千秋の思いで時間の経過を待っていた。

時に北方の暗黒を破り、信号弾一発の揚がるを認め遂次信号弾が打ち上げられ渡河部隊全部の上陸成功を知った。

第一線部隊たる我が聯隊は、午前六時予定上陸地点より約千メートル下流に流されたが無事上陸予定の線に進出した。敵の河岸監視部隊は何れも疲労困憊し昏睡状態であった。

これを捕虜となし予定線につき、八圩港鎮北側卓字圩附近にわたり陣地を占領している約六百の敵に対し攻撃を開始した。敵は頑強に抵抗したが、午後三時三十分遂次退却を始め之を急迫して午後四時四十分、靖江城を占領、城門高く日章旗を樹てた。

聯隊は第三大隊を靖江に残置（聯隊の指揮下を離れ支隊の直轄となる）し、主力は翌九日朝、靖江を出発十三日鎮江に到着し次期作戦を準備した。

十二月十三日師団は愈々滁縣を占領して津浦線を遮断すべき軍命令を受領し歩兵第二十六旅団、山砲兵十九聯隊を基幹とする部隊を前衛として、十四、十五日の間揚子江を渡り滁縣に向わせ、師団主力は之に続行することとなった。此の頃軍主力は完全に南京を占領した。

聯隊は前衛となり前進し十二月十八日夕、水口鎮に達した時約六百の敵（機関銃、迫撃砲を有す）が滁縣東側高地の概設陣地を占領しており、又南京より敗退中の敵は鉄道及び道路によって滁縣附近を北方に向かい退却中であるとの報を受けた。

前衛司令官沼田旅団長は、明朝主力を以って水口鎮～滁縣道方向より、一部を以って此の敵を捕捉殲滅するに決した。聯隊、山砲、騎兵、工兵、通信は迂回隊となり十九日午前四時水口鎮を出発、正午趙家營東側高地に達した時、敵の列車が沙河駅及びその附近を北方、南方に運行しているのを目撃し之を捕捉する為急進した。

重機を有する約三百の敵がいるのを発見、直に之を攻撃、午後四時停車場を占領し津浦線を遮断した。尚、高地上の敵は頑として動かず、よって夜間攻撃を続行し翌二十日朝之を占領し任務を完了した。前衛主力も又滁縣を完全に占領した。

軍主力は十二月十七日南京にて入城式を行った。(支隊直轄の第三大隊は、昭和十三年一月七日南京に入城)

その後師団は滁縣附近の警備に任じ、聯隊は主力を以って張八嶺に次いで管店附近に推進し警備に任じた。

旅団長も二十五日管店に到着し、淮陽作戦も近づいてきた。

(参考文献「新発田聯隊史」「聯隊歴史 歩兵第百十六聯隊」より)